

## 復活の絆をつなごうキャンペーン 活動報告 その1



5月14日当社会長藤木が陸前高田市 戸羽市長を訪問し  
被災地の復興を想い、  
横浜市から預かった玉楠の苗木1株と  
寄付金を贈呈してまいりました。

株式会社 ありあけ  
広報室

弊社では『復活の絆をつなごう』をテーマに、東日本大震災の被災地復興へ向けた活動に取り組んでおります。その一環として、5月14日に弊社代表取締役会長 藤木が陸前高田市へ訪問しました。

今回の東日本大震災で、陸前高田市に奇跡的に残った高田松原にある一本松の記事が藤木の目に留まりました。その松の生命力が、慶応時代より地元・横浜に存在し、火事、関東大震災、戦争などを乗り越えて復活の歴史的な存在となっている『玉楠（たまぐす）』という一本の樹に重なり、他人事ではないとそのとき感じたようです。そんな想いから支援を思い立ちました。

当社では、一昨年の横浜開港 150 周年の記念に、横浜市の開港資料館よりそのたまぐすの苗木を3株譲り受けております。そこで今回の訪問では陸前高田市にそのたまぐすの苗木1株と、『復活の絆をつなごう』運動で寄せられた義捐金の一部を用意し、少しでも何かお役に立てるようにと考えました。

東北新幹線一ノ関駅から車で山道を1時間以上ゆくと陸前高田市に入ります。ある地点から一気に風景が変わりあたり一面は瓦礫の山。訪問した時は、震災から2ヶ月が過ぎておりましたが、まさに「言葉が出ない」という悲惨な風景でした。当社会長の藤木は、自分自身の挫折を体験した人生を重ねて、何人としてもあきらめずに、ここから未来に向けて希望を持ってもらいたいと感じました。

まずは、高田松原の一本松の下で、「高田松原を守る会」副会長の小山芳弘さんと面会しました。守る会ではこの松を“希望の光の木”と名付け活動を始めておられ、たまぐすについてのお話をすると「確かに縁を感じますね。復興のシンボルとして、大切に育てて生きたい」とお話をいただきました。また、「復興とともに松の木を守るためにも支援が必要」との小山さんのお話に、当社としてももっと何かお役に立ちたいという想いはさらに深くなってきます。



高田松原の一本松 5月14日撮影

その後、陸前高田市 戸羽市長様を訪問しました。

陸前高田市役所も津波で崩壊し、市内高台にある給食センターが仮役所になっています。その事務室で戸羽市長様と藤木が面会しました。「復興にはどのくらい時間がかかるかわからないが、この街を必要としている市民の方がいる限り、頑張りたい」というお言葉に、復興へ向けた強い意志を感じました。

たまくすの苗木をお渡しすると「高田松原を守る会の小山副会長ともよく話をし、一本松とともに大事に育てていきたい」とお話をされていました。また義捐金とともにハーバーをお渡しすると、当社のハーバーもよくお召し上がりになっていたということで喜んでいただきました。

今回、陸前高田市を訪問し、ほんとうに壊滅的な状況を目の当たりにしましたが、戸羽市長をはじめ、守る会の小山副会長をはじめとする市民の方はとても前向きで、復興へ向けて一生懸命活動されていることが胸を打ちました。支援をとどけた私どもが逆に勇気をいただいて帰ってきました。

今回の訪問で、今後さまざまな活動で被災地の支援を行って行きたいと思います。

2011年(平成23年)5月15日(日曜日) 青森県 陸前高田市

## 復興の象徴に 「たまくすの木」

### 横浜から陸前高田に苗寄贈

横浜で江戸の大火や関東大震災などに耐え、横浜開港資料館(横浜市中区)の中庭に茂る「たまくすの木」の苗木1株が14日、岩手県陸前高田市に寄贈された。津波にのまれながらも一本だけ無事だった同市の名勝「高田松原」のことを伝える本紙記事を読み、木の生命力の強さを感じた横浜市の菓子メーカー会長が、高田松原を守る会に栽培を委ねた。

たまくすは、クスノキ科「タブノキ」の別名。同資料館の木は、1854年のペリー上陸を描いた資料館

所蔵の石版画「ペリーの横浜上陸」にも登場。12年後の横浜大火で幹が焼失したり、1923年の関東大震災でも幹が焦げるなどした

が生き残った。

横浜市港北区の菓子メーカー会長・藤木久三さん(69)は5年前、木の生命力にあやかろうと店舗前にミニメントを作り、同資料館から譲り受けた苗木3株を育ててきたという。

藤木さんはこの日、高田松原の一本松の下で、「高田松原を守る会」副会長の小山芳弘さん(69)と復興への思いを語り合った。小山さんは「一本松同様、復興のシンボルとしてしっかり育てたい」と話した。



「たまくすの木」の苗木を手に、復興への希望を語る藤木さん(左)と小山さん(後方は高田松原で1本だけ残った松の木)(14日、貞末ヒトミ撮影)